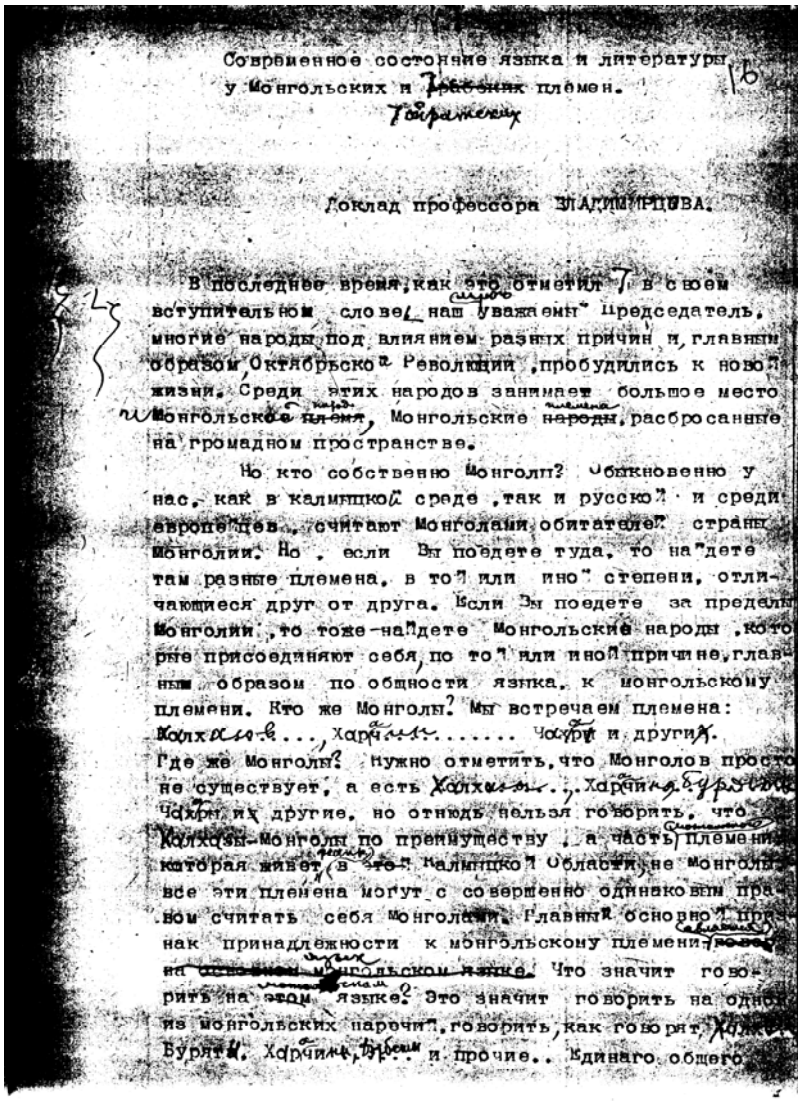
第六章

ウラジーミルツォフの理想と現実



Современное состояние языка и литературы у Монгольских и Ойратских племен.

Доклад профессора ВЛАДИМИРЦОВА.

В последнее время, как это отметил в своем вступительном слове наш уважаемый Председатель, многие народы под влиянием разных причин и, главным образом Октябрьской Революции, пробудились к новой жизни. Среди этих народов занимает большое место Монгольское племя, Монгольские народы, расбросанные на громадном пространстве.

Но кто собственно Монголы? Обыкновенно у нас, как в калмыцкой среде, так и русской и среди европейцев, считают Монголами обитателей страны Монголии. Но, если Вы поедете туда, то найдете там разные племена, в той или иной степени, отличающиеся друг от друга. Если Вы поедете за пределы Монголии, то тоже найдете Монгольские народы, которые присоединяют себя по той или иной причине, главным образом по общности языка, к монгольскому племени. Кто же Монголы? Мы встречаем племена: Халхасов..., Харчин..... Чахры и других. Где же Монголы? Нужно отметить, что Монголов просто не существует, а есть Халхасы..., Харчины, Чахры, их другие, но отнюдь нельзя говорить, что Халхасы-Монголы по преимуществу, а часть племени, которая живет в Калмыцкой Области, не Монголы. Все эти племена могут с совершенно одинаковым правом считать себя Монголами. Главный основной признак принадлежности к монгольскому племени на монгольском языке. Что значит говорить на этом языке? Это значит говорить на одном из монгольских нарочий, говорить, как говорят Халхасы, Буряты, Харчины, Урсы и прочие. Единого общего

1928年2月、アストラハンで行われたカルムィク文字・言語学会議にて読まれたウラジーミルツォフの原稿（修正は彼の手による）

第六章　ウラジーミルツォフの理想と現実

６－１　1929 年『モンゴル文語・ハルハ方言（ナレーチエ）比較文法』
６－２　ウラジーミルツォフの考えたモンゴル諸語の未来像

モンゴル研究にいまだに大きな意味を持つ多くの業績を残した研究者ウラジーミルツォフは、積極的に文字改革に参加したポッペと違い、第四章で少し触れたようにカルムイクの言語政策担当者たちに招かれて一度だけ発表を行い、序章で見たとおり 1931 年にやはり招かれて言語学会議に参加したことだけが知られている。こういった行動から見れば、彼は、それほど積極的に言語政策に関わらなかったように見える。

しかし、彼の残した論文の内容を詳しく検討し、さらに、多くの人が書いた彼の人物評やシャグダロフやウルムジエフなどが専門的に彼を研究した論文を読んでみると彼の別の像が浮かび上がってくる。彼が残した研究は文学研究、歴史学、言語学、民俗学などの多岐にわたっており、モンゴル学において彼は無視できる存在ではなく、その発言に影響力がなかったとはいいがたい。また、民族の文化の発展のために学者を多く動員した中央政府にせよ、モンゴル系の諸民族にしても彼を必要としていたのである。

彼は 1884 年、カルーガに生まれ、1931 年８月 17 日、47 歳でラテン文字化が始まった初期に突然亡くなるのだが、それまでに、カルムイク、ブリヤート、モンゴル人民共和国から、北京、パリ、ロンドンにいたるまで、多くのところで調査・研究を行い、モンゴル諸語に関する数々の論文・著作を残している。

言語関係において、一番重要な著作は『モンゴル文語・ハルハ方言比較文法』であるが、この他、モンゴル語におけるアラビア語やトルコ語などの要素を分析する論文も書いており、亡くなる直前に書かれた論文『モンゴル諸文章語』『13 世紀の国際文字　パスパ文字』は二つとも言語に関するものであった。

彼は、ロシア語、モンゴル語の他、英語、フランス語、ドイツ語、チュルク語、チベット語、サンスクリット語、ペルシャ語に通じ、アラビア語、中国語にも手をつけていたといわれる。残された論文の題名だけ読んでいくと、モンゴル語に他から入った様々な要素を取り除きながら、モンゴルとは何なのかということを探っていこうとする姿勢が見える。彼のような時代をさかのぼって、モンゴルを探求していこうとする人にとって、自分が生きている時代の言語政策はあまり関心がないかのように見える。が、決してそうではなかった。全く関係がないような題名の論文を読んでみると、そこには間接的にではあるが、当時の言語政策に批判的であった彼の態度が見えてくるのである。

この章では、ウラジーミルツォフの論文や著作を中心に、彼がモンゴル諸語の言語政策、ひいてはモンゴル諸語の将来をどう見ていたのかを検討する。

まずは、彼の代表的著作である 1929 年『モンゴル文語・ハルハ方言（ナレーチエ）比較

文法』を取り上げ、その本が作られる経緯などから、彼がモンゴル諸族における言語をどう見ていたのかを確認したい。

６－１，1929 年『モンゴル文語・ハルハ方言（ナレーチエ）比較文法』

『モンゴル語・ハルハ方言比較文法』（以下『比較文法』）は、モンゴル語の言語学的研究の金字塔的な作品であるとされるほど重要な文献の一つになっている。現在は、その歴史的な比較言語研究の面だけが強調され評価されているが、実は単なる言語の比較研究ではなかったようである。

この本が書かれた背景を検討してみよう。

革命前にモンゴルを幾度となく調査したことのあるウラジーミルツォフは、革命後の1925 年にもヘンティ、ケルレン河上流を調査している。

そこで彼が見たものは革命家が人々に向けて話している言葉の中にどんどんと文語が入り込んでいるという事実であった。実際、モンゴル文語と様々な口語とのあいだにはかなりの開きがあり、その役割分担もはっきりしていたようである。つまり、モンゴル文語というモンゴルをまとめる統一体と、下部構造としても様々な方言といったダイグロシア状態であったのである。

それが革命により、文語と口語が融合して新しい言語が形作られている、それを観察し、文語と口語の差が近づいてゆく様を記述していこうとウラジーミルツォフは考えたようである。まずは短い形で1927年に、調査報告としてそれをまとめた後、本格的に研究した作品を書いた。それを、モンゴル語の過去から現在に至るまでの言語資料を集め比較検討したのが『比較文法』だったのである。

余談ではあるが、1927 年に出版された論文で彼がモンゴル文語の語彙としてあげている中には、少しでも公式の席に立ち会うことができたなら、現在、現代モンゴル語の口語として普通に聞こえることばもあり、逆にウラジーミルツォフが口語としているものの中に使われなくなっていることばもある。このような言語の変化に驚きを感じるが、これはウラジーミルツォフの生きた時代に起きた変化だったのである[Владимирцов(1927)]。

この『比較文法』では、音声学的な研究を主に扱っている。前書きなどにも示されるとおり、その後、つづけて形態的な比較なども進めていくつもりであった[Владимирцов(1929), IX]。しかし、続編はが出されることはなかった。1989 年に出されたこの復刻版にある科学アカデミーのアルパートフによる前書きによれば、この本は出版当時、非常に激しい批判に晒され、彼は結局この本の続巻を出すことを放棄したのだという[Владимирцов(1989) III]。

彼が批判されていたことは、彼の弟子でありモンゴル学者であるニコラス・ポッペによる追悼文においても伺える[Поппе (1932c)]。

激しく批判された彼の言語思想とは何だったのだろうか？

６－２，ウラジーミルツォフの考えたモンゴル諸語の未来像

問題となったと推測される論文は、彼が亡くなった直後 1931 年に出版された「モンゴル諸文章語」である。現在、この論文の功績とされていることは二つある。ひとつはモンゴル文字をモンゴル語に導入した時代はチンギス・ハーンの時代ではなく、さらに前であったと推測したこと。もう一つは、その分析の過程でこの文章語はモンゴルの西の支族、ケレイトのことばをもとにして作られたものであると結論付けたことであった。この論文の副題は「モンゴルとカルムイクの文字のラテン文字化に向けて」であったが、不思議なことにこの論文にはラテン文字改革についても、あるいはその賞賛についても述べられていない。ラテン文字に関しては、ただ冒頭部分に次のような言葉があるだけである。

ラテン文字への移行はモンゴル人、ブリヤート人、カルムイク人にとって新しい（ラテン文字）文字を取り入れるというだけのことでなく、彼らの言語自体の大きな変化をも意味するものである。なぜならば、上に述べた人々は大衆にわかりやすいであろう、人民の生きた方言に基づいた、日常会話や、人民の創作する文芸作品に用いることができる新しい文章語を作り上げ、導入しようとしているからである[Владимирцов(1931a), 1]

しかし、その後は、文章語をその当時憎むべきものと語られてきた封建領主たちの作った人工的な言葉だと述べながら、しかし、人々が美しくあるいはエレガントに話すときは、これらの文章語の言葉を用いることを述べ、文章語が美しく、あるいは重要なものとして考えられてきたこと、口承文芸の世界でも、祝いの言葉を述べるときでも文章語が「本を読むように」語られてきたことを指摘し、また、その伝統は革命家たちにも受け継がれ、文章語の語彙は革命歌にも入ってきていることを指摘しているのである[Владимирцов(1931a), 1-4]。そこまでが現在の話で、その後はウイグル式モンゴル文字の起源から、現在までモンゴル人たちが使ってきた文字に関する歴史的概説である[Владимирцов(1931a), 4-17]。

1931 年５月 31 日に書き終わったとあるこの文章は、表題、そして特に副題とはかみ合わない内容となっている。死後の出版であることから、書き直せなかった部分もある可能性はあるが、非常に引っかかる。

その疑問を解く鍵となると考えられるのは、1928 年２月に彼がアストラハン市で行われた正書法と文章語に関する会議の冒頭でカルムイク人たちに向けて行ったスピーチである。

すでに第四章で詳しく述べたが、この会議は1924年からそれまで使っていたトド文字を廃し、ロシア語でキリル文字を使っていくことを決めたカルムイクの人々の間で、それま

でアルファベットと正書法に関する意見がまとまらず、なかなか先に進まない状態であったため、モンゴル学の権威者を招いて解決しようとするためのものであった。その「モンゴル学の権威者」として呼ばれたのがウラジーミルツォフであり、1927 年 12 月にする予定であった会議を彼の予定に合わせて２月に変更するほど、彼の力を必要としていたのはすでに述べたとおりである。

『モンゴルとオイラート諸部族の言語と文学の現状』と題されたこのスピーチは、しかし、カルムイクの人々が望んでいたような解決策を与えるものではなかった。

ここで彼はモンゴル、そしてロシア、アラビアの言語と文学の現状を引いて、彼自身の意見を間接的に話したのである。

このスピーチの冒頭で彼はモンゴルという民族は何かという問いを立て、ヨーロッパでは普通、モンゴルだけだと思われているが、中国のチャハル、ハルチン、そしてブリヤートなどもいると説明している。また、モンゴル語とは何かという中ではハルハ、ブリヤート、ハルチン、ドゥルベトを挙げている。これらの発言の中では明確に言わなかったが、カルムイクにもその支族がいるドゥルベトの名前を盛んに出すことによって、その中にはカルムイクもいるのだと暗示しているような発言であった[P3/2/1144/16-17]。

そして、キリル文字化を賞賛することもせず、明確にはいわなかったが、モンゴル文字による他のモンゴル諸族との関係の保持を訴えていた。

例えば、それは次のような言葉に伺える。

（チンギス・ハーンや元朝の時代のようなモンゴルが文化的に進歩的な民族であった時代は過ぎ去ってしまった）。ここで問題とされるのはモンゴル文語をどうすべきかである。なぜなら、これは文化的な営みにおける一番重要で、一番中心的な問題なのであるから。現在、モンゴルの支族、その中には独立したモンゴルや南のモンゴル人そして、我々（の国にいる）ブリヤート人やその他、チベットやトルキスタンにすむものがいるが、そういったほとんどの支族には一つ共通したものがある、それは、彼らが自分達の文字とモンゴル文語を持っているということである[P3/2/1144/17]

また、このモンゴル文語は「共通の唯一の遺産である」といい、

、

ブリヤート人（複数）が書いたものを、北京の道ばたでモンゴル人が読むことができ、ホブドのドルベットが書いたものをチベットの辺境に住むモンゴル人が読むことができる。この、一つの共通の財産（достояние)、まさに同じような現象があちらこちらで見られないだろうか？見られたし、現在においても見られるのである[P3/2/1144/18]

「同じような現象が」とだけいって、やはり明確にカルムイクもとは言わないのだが、彼らもその共通の財産を持っているのだと指摘したのである。事実、1648 年以降、彼らの

間ではモンゴル文字を改良したトド文字が使われていたが、同時にモンゴル文字もホダム文字という名前で呼ばれ、寺院やモンゴル文字を使う地域との通信手段などに使われていたのである。学生の頃からカルムイクに何度も調査で足を運んだウラジーミルツォフが、この事実を知らないわけはなかった。

また、この章の表紙の写真でわかるように発表原稿では元々の題名が『モンゴルとアラブ諸部族の言語と文学の現状』となっており、後でわざわざアラビアを消し、オイラトと直されたのである。この発表で一番強調されたのは、モンゴルはアラビアが一つであるように、一つであるべきなのであるという強い主張であった。しかし、モンゴル革命初期に彼が観察したトド文字を捨てモンゴル文字に回帰しようとするモンゴルのオイラト系の人たちと、同じオイラト系だが別の道を歩もうとするカルムイク人たちとの言語や文学が別れていくことを憂いていることをより強調したかったことが変更の真意であったかも知れない。

また、このような事実から 1929 年の『比較文法』を振り返ってみると、実は導入の部分に次のような部分があるのは驚くに当たらない。つまり、彼はモンゴルという一つの言語を立て、その下位区分として、ハルハ大方言（Наречие）、オイラト大方言、ブリヤート大方言を立てたのである。カルムイクはオイラト大方言のさらに下位区分に位置していた。

同様にポッペもある時期までは、ウラジーミルツォフのようにカルムイク大方言、ブリヤート大方言ということばを使っていた。ポッペはその後、時代の風向きが変わるのを察して、方言から言語へと表現を変えたが、もともとレニングラードでは文章語を言語とみなす方が主流であったようである。

さらにウラジーミルツォフはこのスピーチにおいてロシア語を引き合いに出し、ロシア語の文章語がそれまで文章語として使われていた教会スラブ語の要素を引き継いで形成されたことを指摘している。ロシア語の中の教会スラブ語的要素に関しては、教会スラブ語とロシア語という二言語の並立状態にあったのを高名なロシアの学者ロモノーソフが 1758 年に「ロシア語における教会語の効用」という短い論文を書き、文体の差に組み替えることによって教会スラブ語要素をロシア語のなかに取り込むことを容認した結果定着したものであるといわれる[藤沼貴, 小野理子, 安岡治子(2000), 104]。とするなら、ここでウラジーミルツォフがロシア語にかつておきた現象を例に出すことで、それまで文章語を封建領主や、聖職者たちのことばだと排除しなければ、カルムイク人の使う口語も文章語と相互浸透するものになってゆくだろうと主張する意図があったと推測できそうである。以前、ヘンティ・ヘルレン河上流で観察した文語と口語の融合現象は彼の考えを正当化する根拠にもなると思っていたはずである。

シャグダロフは 1921-1930 年代のブリヤートで出版されたモンゴル文字の印刷物に、口語の要素が多く入り、およそ、その前の時代のモンゴル文語とは違うものになっていたと指摘する[Шагдаров(1989), 122]。文章に現れた現象であるが、モンゴルだけでなくブリヤ

ートでも、融合のプロセスが進んでいたのである。

このため彼は、キリル文字化やラテン文字化には良い印象を持っていなかったようである。

彼の最後の作品であるかも知れない『13 世紀のモンゴル国際アルファベット』では、13 世紀にモンゴル語、中国語、朝鮮語、チベット語などを表記するための国際アルファベットとして作られたパスパ文字の言語学的、政治的意味を問いつつ、最後の章で「これらのモンゴルのパスパ文字に関する情報から、モンゴル人、ブリヤート人とカルムイク人たちが、ラテン文字という国際的なアルファベットに基づいて新しい文字体系を作り、モンゴル語の方言であるハルハ方言と、カルムイク＝トルゴート方言を用いて新しい文章語を作ろうとし始めた今日において何らかの教訓を引き出すことはできないだろうかという思いに惹かれる…」と記している[Владимирцов(1931b), 41]。

パスパ文字は元朝が滅ぶと使われなくなるが、そのように新しいアルファベットが広まるのを妨げたパスパ文字の言語学的特徴は、非常に音声に忠実であったことだと指摘し、そのように音声に忠実であったことは実践の上では役に立たなかったと記したのである。この論文の最後を彼は「モンゴルとカルムイクの文字のラテン文字化にも何らかの助けになるかも知れない」と強烈な皮肉を言い放って締めくくっている[Владимирцов(1931b), 42]。

ここにおいて、彼が『モンゴル諸文章語』において「ラテン文字への移行はモンゴル人、ブリヤート人、カルムイク人にとって新しい（ラテン文字）文字を取り入れるというだけのことでなく、彼らの言語自体の大きな変化をも意味するものである」と彼がいったことの意味が明らかになる。それはどの方言にも似ていないモンゴル文語をすて、より音声に忠実なラテン文字を選ぶことによって、それぞれの言語が、分裂する方向へと向かいかねないことを危惧したことばだったのである。

しかし、彼のこのような考え方は批判されることになる。

批判の内容が明確にかかれたものはないが、当時の言語政策の雰囲気から考えれば、考えられるのは次の三つである。

一つは、「革命の文字」であるラテン文字化に反対し、封建領主の使う言語の文字を擁護しようとしたことである。

二つ目は、ブリヤートやカルムイクの言葉を言語ではなく方言としたことである。当時の民族にたいする言語政策からすれば、文章語は普通の人民の言葉に基づいたものであり、古くからあり因習のこびりついた旧来の文章語は捨て去るべきものであった。しかし、彼はその因習のこびりついた言葉のみを言語とし、人民の言葉を方言と定義したのである。

三つ目は、捨て去るべき封建領主や坊主たちが使う、普通の人民には理解できない文語を人民の言語に融合させて使おうとする彼の考え方にあったのである。ウラジーミルツォ

フや藤沼の見解に従うならばロシア語はまさにそのような歴史を経てきたのに、モンゴル語では許されなかったのである。

革命前までモンゴル諸族の言語はダイグロッシア状態にあった。それは、現在モンゴル国と呼ばれる地域だけではなく、広く、中国の内モンゴルから、ブリヤート、果てはカスピ海沿岸のカルムイクにいたるまで広い範囲に見られたダイグロッシア状態であった。

革命はこうした言語状態から、「封建的」な要素を捨て去り、広く人々が、教育を受け、さまざまな場所で使用できるための言語、「人民」、「労働者」あるい「大衆」のことばに基づいた言語を形成するという、「言語の民主化」を図るようになる。こうしてダイグロッシア状態は崩れていこうとしていた。

彼はこうした中、調査中にモンゴルで革命家たちが行ったスピーチに多くの文語要素を発見し、このような形でダイグロッシアが崩れていくのではないかと予想した。こうして、『比較文法』がうまれる。結局は、詳細に構築された歴史比較言語学的な部分だけが有名になってしまうことになるのだが、その本来の目的はその題名の通り、モンゴル文語とハルハ方言の違いを記述し、現在革命によって起こっている歴史的な変化を記録しようという試みであったように思われる。

この『比較文法』に見られるように彼は、ブリヤート人、カルムイク人の言葉に対してブリヤート語、カルムイク語という名前を最後まで与えなかった。彼にとってモンゴルを含めこれらの民族の言語は、同じ文字により遠方にいながらにしてコミュニケーションができる大きな市場を持った一つの言語であったからである。

バラーディンやジャムツァラノーたちブリヤート人知識人たちと彼が親しく交流していた事実を知るなら、ブリヤート人たちの中には、ウラジーミルツォフのモンゴル世界像を理解し、共有するものがいたと考えられる。そのブリヤート人たちの強い影響力のもとにモンゴルも近代化の道を歩むことになるが、言語的には、モンゴル文字を使用してきたとき同様、ラテン文字化運動以降もブリヤートとモンゴルの統一性を保つかたちでの活動が志向されたのである。一方のカルムイクは独自の道を歩もうとした。1924 年 1 月、他地域がまだモンゴル文字に留まっていた時期にキリル文字化を始めたのである。1928 年 2 月カルムイクがそのような状態であったからこそ、わざわざ赴いて、ウラジーミルツォフは自説を展開し、説得を試みようとしたのではなかったのだろうか。結果としてカルムイク人たちは彼の意見に耳を貸さなかった。しばらくしてラテン文字化がこの三地域で始まり、1931 年 1 月、モスクワでモンゴル諸族文字・言語問題会議が開かれ、アルファベット、語彙、文法における、モンゴル諸語統一原則を確立しようという試みが成された。しかし、この試みは失敗に終わる。

1931 年 8 月 17 日、ウラジーミルツォフはこうした三地域のその後の運命を見ずにその生涯を終えた。

革命によって、文語と口語が融合してゆき、各地域のコミュニケーション手段が保たれることによって広く、一つの言語市場が保たれつつ、文語が民衆の手に届くところへ降りてくることによって、言語の「民主化」がなされる。こうしたウラジーミルツォフの見た未来像とは全く違った形で、カルムイクにおいては当初から、ブリヤートにおいては内部抗争と、外からの圧力によって、モンゴルにおいてはブリヤートの影響力を脱することによって、それぞれの地域で他から独立した形で、それぞれの口語に基づいた文語を形成し、それぞれが「民主化」を達成した。現在においてはそれぞれが別の民族意識を持った集団として存在している。

最後にまとめとして、「言語」の統合と分離の問題とモンゴル諸語を検討してみたい。